

瀧の上の 三船の山に 居る雲の

常にあらむと わが思はなくに

(弓削皇子 卷三・二四二)

は吉野は神仙境として表現されており、この歌も『文選』などで特定の場所にとどまる雲が神女の化身とされたことを意識していたのかもかもしれません。

西暦699年8月21日(文武天皇3年7月21日)、文武天皇の皇子のひとりである弓削皇子が没しました。生年は未詳ですが、673(文武天皇2)年頃といわれており、若くして亡くなったとみられます。

しづきを上げて流れることを意味する「瀧」です。現代語の瀧にあたる古語は「垂水」でした。柿本人麻呂の吉野讀歌に「水激つ瀧の都」(巻一・三六)と表現されたとおり、吉野の川は流れが激しいことで知られていたように、弓削皇子が紀郎女に贈った「吉野川行く

やまと
万葉がたり

瀧の早みしましくも淀むことなくありこせぬかも(巻二・一一九)という歌からもそれがうかがえます。『万葉集』中に弓削皇子が詠んだ歌は8首あり、吉野から飛鳥の額田王へ贈った歌(巻二・一一一)などもあります。

弓削皇子が生きた持統天皇代には、30回以上もの吉野行幸が記録されており、そうした折に詠まれた歌であったと考えられます。

「三船の山」とは、吉野離宮(吉野町宮瀧)から吉野川をはさんだ場所にある山とされ、西側の象山との間には喜佐谷があり、「象の集である『懐風藻』で

不老長寿の神仙が住むイメージを与えられていた吉野で、若くして亡くなる弓削皇子がこの歌を詠んだことを思うと、感慨深いものがあります。(県立万葉文化館・井上さやか)

「詠」激流のほとりの三船山にかかる雲のように、いつまでもいるだろうとは、私は思わないことだ。